

介護職員としての 自覚と葛藤

[第1回]



小山大介 [こやま だいすけ]

介護老人保健施設せんだんの丘(宮城県)
介護課長

はじめに

当施設は、わが母校でもある東北福祉大学の関連施設として、2000年4月に開設した。せんだん(栴檀)とは、^{びやくだん}白檀のことで、香木として用いられるらしい。平家物語には「栴檀は双葉より芳し」と記載されており、栴檀が双葉のときから良い香りを放つことから、「優れた才能をもつ人間は、幼いときからその兆しが見えてくる」という意味があるそうだ。

福祉大の近隣地域に関連施設が4つあるのだが、皆「せんだんの～」という施設名となっている。そのなかで唯一の老健施設として、いまでは単独型施設としては付帯する居宅事業の種類の多さが日本一となり、入所事業も超強化型施設になるなど、成長を続けてきた。そんな老健施設の介護職員としての「仕事」を全3回の連載で振り返り、自分の仕事に対する考え方や思いを中心に表現していきたいと思う。

入職までの経緯

卒業を前に就職活動もおっくうだったので、体裁を保つために手ごろな一般企業の求人を探した。「初任給」に惹かれて採用試験を受けた健康食品会社の内定を得たが、両親からは、「お前みたいな人間を就職氷河期の時代に採用するような企業は、きつとろくでもないだろう」と強く反対された。就職のコネがあるから新潟に戻って来いとも言われたが、親の世話になることに抵抗があり、家族の反対を押し切って内定企業にそのまま就職した。健康食品の営業販売員となったのだが、簡単にいうと周辺の地域に特売のチラシを配って店舗に集客し、セールストークで高額な商品をお勧めするという内容だ。生活するためとはいえ、自分の価値観と大きなギャップがある仕事に耐えきれず、すぐに辞めてしまった。

どうせ働くなら、汗水垂らし、人の役に立つような誠実な仕事をして対価を得るのが性に合っていると覚悟を決め、母校の就職課を訪ねた。「ヘルパー2級を取得すれば、関連施設に介護職員として募集がある」と紹介を受けた。ヘルパー2級講座を受講し、付け焼き刃の知識と技術ではあったが、晴れて、2002年9月「介護老人保健施設せんだんの丘」に時給800円の契約社員として入職した。

在宅復帰促進ユニット編 新人時代

せんだんの丘は、1ユニットが16～25名の5ユニットに分かれている定員100名の老健施設である。現在、「ユニット」の定義としては10名程度を指すので、厳密には「ユニット型」ではなく、「ユニット的な環境」の施設となる。これは、全国的にもユニット型の施設が珍しく、制度化される以前に「ユニットケア」という手法に着目し、老健施設としても先駆けて導入した背景があるからだ。配置された特定の職員が、特定の利用者のケアを行うという考え方は、ごく自然で合理的だ。馴染みの関係がつくりやすく、日々の情報共有が円滑に行えるメリットも大きい。特徴ある5ユニットから、利用者それぞれの状態やご希望に応じて選択いただくことが可能となっている(下記表)。

入職後に配属されたのは、「在宅復帰促進ユニッ

3階	3階北 (17名) 医療管理	3階南 (17名) 機能障害対応
2階	2階北 (16名) 在宅復帰促進	通所リハビリ
1階	1階北 (25名) 認知症 (独歩レベル)	1階南 (25名) 認知症 (車椅子レベル)